

セレンナタの思ひ出

村井友子

数年前、私は、メキシコ・グアダハラハラの小さなアパートの二階に住んでいた。アパートの住人は皆それぞれに個性的だったが、中でも娘さんと二人で一階に住むセニョーラは群を抜いていた。

セニョーラは、テレビサ（メキシコ最大のテレビ局）の大物看板女優ルシア・メンデス（強いて言うならばメキシコ版松坂慶子というところか）似の女丈夫で、当時五〇歳をとうに超えていたと思うが、遠目には三〇代ぐらいにしか見えなかった。ある時は栗色の髪をなびかせながらジーンズ姿で、またある時はアップの髪にミニスカートのスーツに身を包んで颯爽と出かける姿は、女性としての気合いに充ち満ちていて、会うたびに感心したものだ。当時シングルだった彼女には何人かの崇拜者と思しき男性がいて、時折、口髭をたくわえた渋い紳士と一緒の姿なども目にした。

ある日の深夜一時過ぎ、いきなり外からギターの音色が聞こえ、切ないテノールの歌声が響き渡った。何事かと窓から眼下を見下ろすと、黒い制服に金ボタンのマリイチ楽団（注参照）がいる。その横には、手持ちぶさたに窓を見つめる紳士の姿が……どうやらセニョーラのボーイフレンド（「ボーイ」といっていいものか）の一人が、彼

女の誕生日にプロの辻音楽士を雇い、セレンナタでハートを射止めに來たらしい。

周知のとおり、セレンナタ（セレナーデ）は、夜恋人のいる窓辺で男性が歌ったり楽器を弾いたりして求愛するというものである。これがあの有名なセレンナタかと思し、その光景に見入る私であった。しかし、その後通算四回もセレンナタを聴くことになろうとは思ってもよらなかったが……あの時、セニョーラがセレンナタの紳士の気持ちに応えて姿を現したのか、はたまたつれなく待ちぼうけをくわせたのかは、残念ながら眠気に負けて最後まで見届けられなかった私に知るよしもなかった。

ちなみにメキシコでセレンナタは今なお若い世代にまで受けつがれており、年頃の娘を持つ母親から、「うちの娘が、この前の誕生日にセレンナタ・デビューしたのよ」と誇らしげに語られた経験もある。

しかし若い恋人同士ならいざ知らず、シニア世代になってなお、色恋沙汰にこれほどのエネルギーと情熱を臆面もなく注ぎ込めるとは。そもそも夜更けにマリイチなんて、彼らの辞書に近所迷惑という単語はないのか。日本人の理解を遙かに超えている。思えばラテンアメリカの人々の生活には、男女関係を基軸とした豊かな文化が息づい

ている。パーティーで欠かせないサルサ、クンビア、メレンゲは、どれも男女ペアで踊るものばかり。一五歳になった女の子のお祝いキンセン・アニエラは、社会にセニョリータとしてデビューすることを意味する。男の子は男の子で、物心ついたときから女性の褒め方をたたきこまれる。そういえばメキシコ人研究者はたとえ公用の出張でも夫人同伴でやってきたっけ。

源氏物語の光源氏ならともかく、男女を巡る社交の文化が希薄な現代の日本から来た私にとって、シニアになってなお、ますます女に磨きをかけ、社交の華であり続けるセニョーラはまぶし過ぎたのであった。

（注）メキシコ独特の大衆的な音楽を演奏する楽団。通常、バイオリン、ギター、ビュエラ（小型ギター的一种）、ギターロン（低音リズムを受け持つ大型ギター）、トランペットによって編成される。マリイチの本家本元グアダハラハラでは、ホテル、広場、居酒屋など、様々な場所にマリイチの辻音楽士達が出没する。またマリイチは人々の生活に広く浸透していて、ホームパーティーやお祝い事の席の余興で雇われ楽士が登場することも多い。
（むらい）ともこ／アジア経済研究所図書館